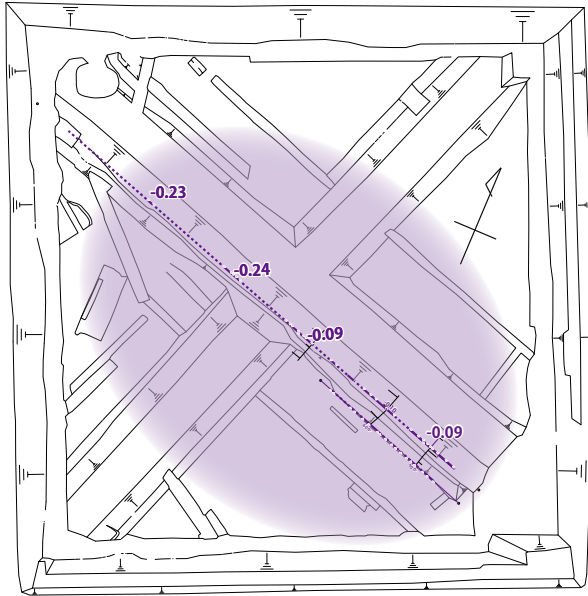
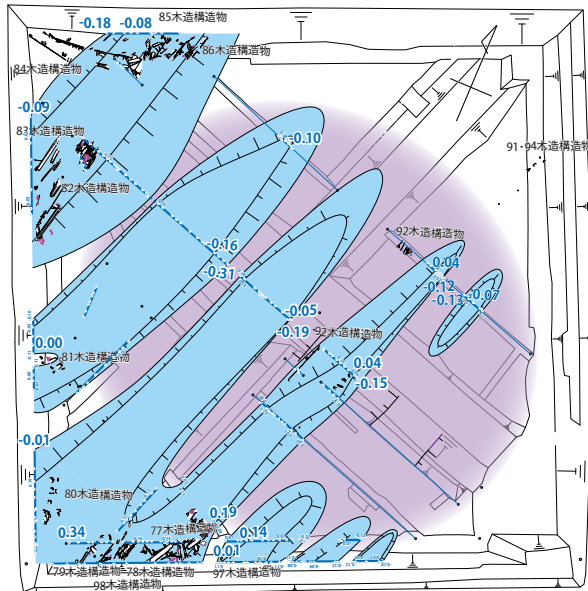


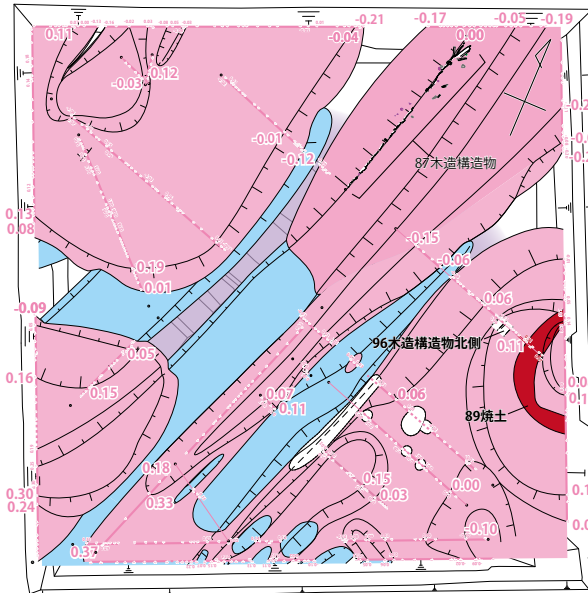
【段階①】



【段階①】



【段階②】



(2) 造成工程の復元

前記の検討手順により、各盛土による造成工程を復元したものが図4～6である。以下それぞれの盛土の段階について述べる。

【段階①】(図4上)

貝殻片や植物遺体の混入が目立つ黒色系シルト層で、弥生時代終末期の土器片を含む。

一連の造成の基盤となっている層と考えられる。

東西トレンチ内でのみ確認されたため、全体的な地形は把握できない。確認レベルから、南東から北西方向に傾斜していく地形のように見えるが、当層を母材とした段階①盛土形成時の掘削が反映されたレベル差の可能性はある。

【段階①】(図4中)

段階①基盤層に細砂が混ぜられたような土層の特徴から、段階①盛土は基盤となる段階①基盤層を母材とし、それらを盛り上げて築かれたものと考えられる。

南北方向の土手状盛土が8条復元される。この土手状盛土は、幅0.4～4m、高さ0.05m～0.35mの規模で確認されるが、東西トレンチ部分以外は基盤層となる段階①基盤層が確認されていないため、正確な規模は不明。全体的に北方向に向けて下がっており、北端部分は今回調査の及ばなかった深度に築かれている可能性がある。

また、木造構造物を構成する横板の多くは段階①盛土中によって埋められており、段階①盛土による土手状盛土を築く際の芯材として設置されたものと判断される。

【段階②】(図4下)

段階②の盛土は、細砂とシルト混細砂を互層状に盛り上げ、その上部に洪水性懸濁物質起源と考えられる砂混じりの灰褐色系シルトを貼り付ける



図4 造成工程復元図1

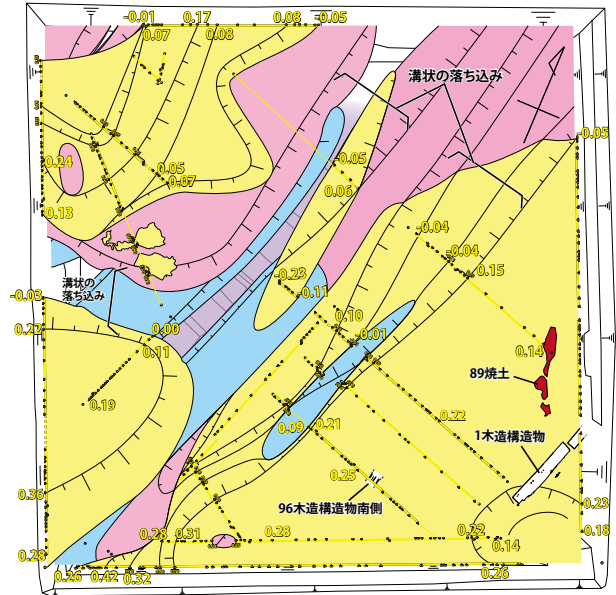
ことを特徴とする。

中央部分は段階①の盛土による土手状盛土の間を埋め、土手状盛土を延長するように埋められるが、それ以外は土手状盛土による凹凸を解消しようとする意図が窺われず、10cm前後の厚さに一律に盛り上げる。そのため、下層の土手状盛土の形状を反映した凹凸をなす。

この段階に矢板列（87 木造構造物）や板を寝かせた状態で埋め込まれ芯材としたと考えられる 96 木造構造物が築かれている。

また、南東端部には、盛土上に焼土を混ぜ込んだようなシルトが使用される（89 焼土）。

【段階③】



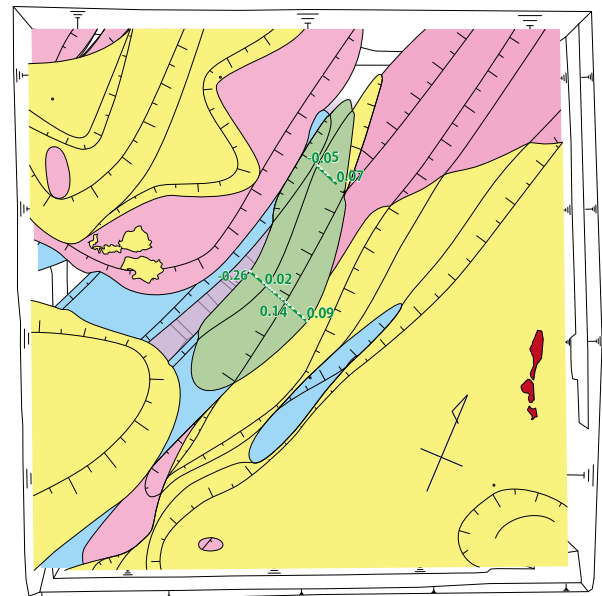
【段階③】（図 5 上）

段階③の盛土は、段階②盛土と同様細砂とシルト混細砂を互層状に盛り上げ、その上面に黄褐色系のシルトを貼り付けることを特徴とする。

主に西・南・東部分に盛土しており、特に南東部分は 30cm以上と厚く盛られている状況が確認できる。そのため東部分において段階①盛土による土手状盛土の痕跡はほぼなくなる。この東部分には、板を寝かせたタイプの木造構造物（1 木造構造物、96 木造構造物南側）が芯材として築かれている。

一方中央部分にも一部盛土が施されるが、中央部分と東・南部の間には造成が及ばず、溝状に落ち込んだ状況になっている。

【段階④】



【段階④】（図 5 中）

黒褐色系シルト混細砂を主体とした段階④盛土は、中央部分の溝状落ち込みの最も深い部分を埋める目的で施されたものと考えられる。層位の把握上分類したが、中央溝状部分に一部認められる段階③と同じ工程の中で施されたものと捉えられる。

【段階⑤】

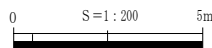
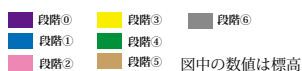
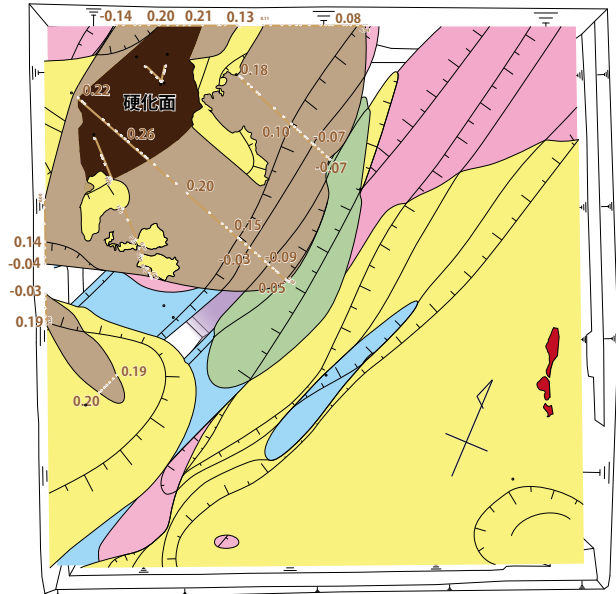


図 5 造成工程復元図 2

【段階⑥】

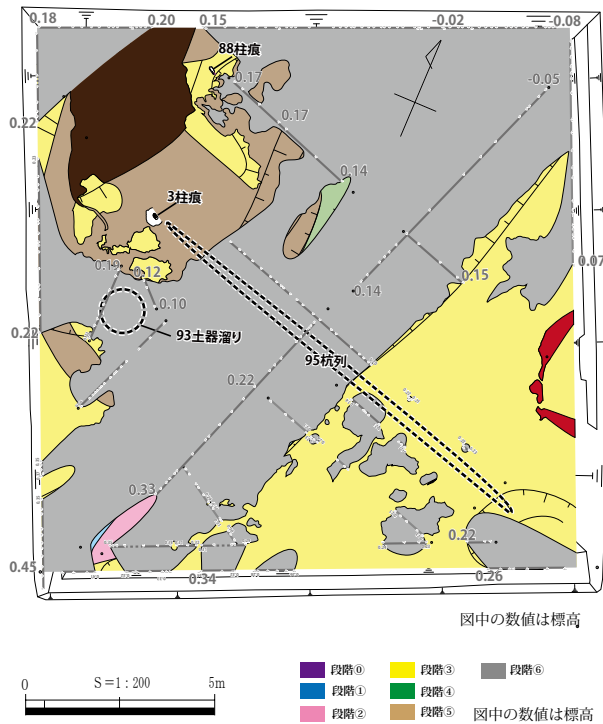


図6 造成工程復元図3

前段階まで残っていた溝状の落ち込みはすべて埋められ、その他盛土上に残っていた凹凸も当盛土によって平らに均される。盛土中の土器細片は、盛土補強のために意図的に埋め込まれたものと考えられる。

この盛土中に完形に近い形の小型の壺や、小型丸底壺、甕形土器（いずれも古墳時代前期前葉）、鹿角製の柄頭状骨角器（写真2）が出土した93土器溜りが検出され、盛土造成途中に執行された儀礼跡と考えた。

また、段階⑥盛土上面には3・88柱痕や95杭列が検出されており、造成後の土地利用状況の一端を示す遺構と考えられる。

(3) 今後の方針

今回把握した造成の単位及び工程をもとに、第19次発掘調査で確認されている盛土との対応関係を検討し、古墳時代前期における中心域北側の地形や利用状況等を明らかにしていく。



柄頭状骨角器（鹿角製）



写真2 93土器溜り出土遺物

【段階⑤】（図5下）

灰黄褐色系のシルト混細砂を主体とする盛土で、西部分にのみ施され、当該箇所をほぼ平坦にする。西端部の最も高い箇所には、粗砂～礫が混ぜ込まれ、硬化面がみられる。当該箇所は第2面検出時には露出しており、次の盛土段階の段階⑥盛土が及んでいなかった。第2面の上面は、上層の古代耕作土層によって削られており、本来の機能面（当時の地表面）は更に上のレベルであったと考えているが、硬化面の状況から、当該箇所についてはあまり削平されておらず、機能面に近い可能性がある。

【段階⑥】（図6）

黒色系のシルト混細砂主体の盛土で、当盛土中には土器細片が多量に含まれている点を特徴とする。